

発達検査と対人援助学

⑳ 子育て支援からみる「家族理解の教科書 graphics」

大谷多加志

先日、編集長の新刊「家族理解の教科書 graphics」が発刊され、5月13日には発刊記念のオンライントークライブが開催されました。私も申し込んだつもりでしたが、ライブ当日になっても Zoom の URL が届かない状況で、よくよく確認すると購入したものが「アーカイブ視聴チケット」となっていたことに気がつきました。というわけでライブ視聴はできず、後日アーカイブで視聴することになったのですが、トークライブを視聴してみると、現在関わっている発達相談や子育て支援事業の中で感じていたことと符合するところがたくさんあったので、今回は新刊の内容と発刊記念トークライブからの自分なりの気づきについてまとめてみようと思います。もちろん、この連載記事を通して興味を持って頂けたら、「家族理解の教科書 graphics」も手に取って頂きたいです。

立場が変われば…

トークライブの中で、**相談を受ける場や立場によって相談される内容が変化する**、という話が出てきました。このことは、自身にも確かに覚えがあることでした。2020年まで私は民間の社会福祉法人で仕事をしていて、2020年以降は大学で教員をしながら、

小児科で非常勤心理士として相談業務に携わっています。その中で、2020年以前と以後とでは、少し受ける質問の質が変わった気がしていました。医療機関で仕事をしている現在は、子どもの症状の原因や予後の見通し、解決方法について尋ねられることが多くなっている気がします。私自身は、どちらかという福祉的な観点や姿勢とのなじみがよいと思っているので、なるべく医療者っぽくならないように、起こっている事態に対して、解決よりも改善を、制圧するよりも付き合うことを優先して相談にあたってきたように思います。

子育て支援での相談で感じた“不安”？

このような相談内容の変化については、子育て支援の事業に関わっている時にも感じました。少し前まで、私自身は「**現代の子育て世代の方は不安が高い**」と認識していました。相談場面に限らず、調査に協力して下さったお子さんの保護者の方からも「〜ってどうなのでしょう？」「習い事って何をさせたらいいですか？」など、細かな事柄についての質問を受ける機会が多くあります。さらにその背景には、ひと昔前の「英才教育志向」ではなく、「何かひとつでも子どもに持たせてあげたい」という切実な思い

があるように感じられました。未来予測が困難な時代です。自分たちよりも先の時代を生きることになる我が子の将来に不安を抱き、せめてもの何かを持たせておいてあげたいという思いが、このような質問を発させているのだと思っていました。

しかし、よくよく考えてみると、少しだけ違和感もありました。例えば、よくある質問のひとつに「英語を習わせるのって、やっぱり早い方がいいですか？」という、英語教育に関するものがあります。ほとんどの場合、回答としては「早ければ早いほどいいというわけではないと思います。やってみて、興味がありそう(好きそう)なら続けてみてもいいんじゃないでしょうか」という、ほとんど何の答えにもないようなことを言っています。経済的にも、人口構造などの社会状況的にも、日本の今後がなかなか厳しそうなことはみんな想像しています。“日本以外でも生きていける力を”という思いが、語学学習に向かわせることは一定理解できます。一方で、幼児期の英語教育が子どもの将来をどのくらい保証するかと言えば、それほど当てにできるものとも思えないですし、保護者の方々もそんな風に信じ込んでいる風ではありません。では、何がこの質問を生み出しているのでしょうか。

タイパ・コスパが常識の社会における子育て

ここで思い当たったのが、「タイパ」や「コスパ」という言葉です。また、近年の映画やドラマなどが、漫画や小説を映像化した「原作もの」や「リバイバルもの」が多くなってきていることともつながっている気がしました。

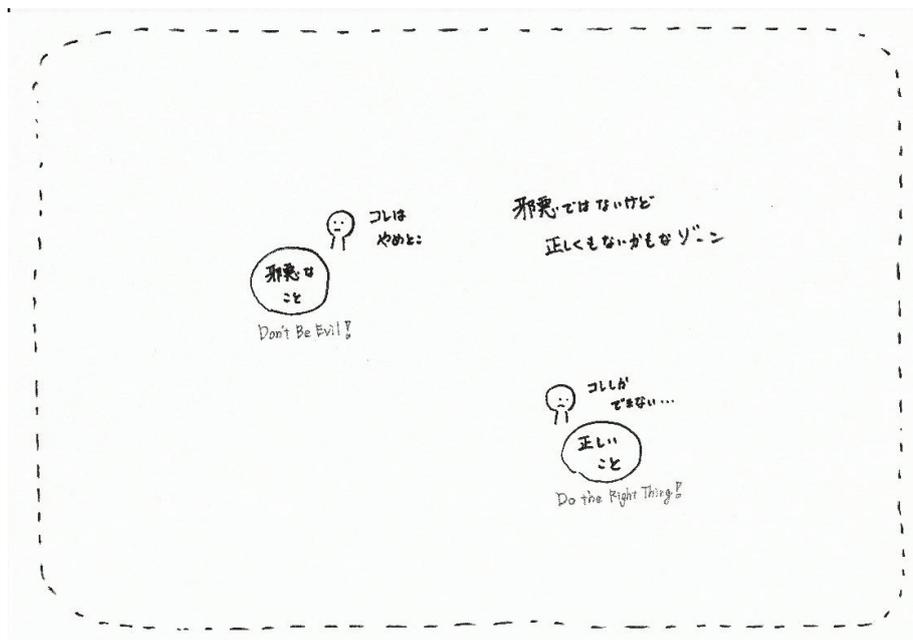
タイパ、コスパという価値観のもとでは、

一番回避すべきは時間やお金をかけて「ハズレ」を引くことでしょう。原作ものやリバイバルものを鑑賞する人は多くの場合、既に原作で話の筋を知っています。つまり、話の面白さは知っている上で「どう映像化されるか」という関心や興味で、映画やドラマを視聴していることになります。もちろん、映像化でコケる可能性はあるでしょうが、素材自体は面白さが担保されているわけで、相対的に「ハズレ」を引く可能性は抑えられるでしょう。

なるべく時間や労力を抑えて最良の結果を得ることが優先される社会になっているわけですが、その価値観が私たちの中にもしみ込んでいて、それによってごく日常生活においても、時間や金銭を「ハズレ」に費やすことへの忌避感が高まっているように思えます。

Do the right thing か Don't be evil か

先日、アソブロック株式会社の団遊氏のブログ(note)で次のような記事を見ました。友人が Google を退職することになり、少し前までとても意欲的に仕事をしていたので驚いたという話と、友人が退職に至った背景として、会社のポリシーが「**Don't be Evil**」から「**Do the Right Thing**」になったことが影響していると話していたことが書かれていました。「Don't be Evil」(邪悪になるな)と「Do the Right Thing」(正しいことをしろ)は、一見するとほとんど同じ意味を指すように思えるかもしれませんが、私たちの社会には「邪悪でもなく、正しくもない」部分もとても広く存在しています。「正しいことをしよう」というスローガンは、「正しいこと(=成果が確実に起こること)し



かできない」という風に、とても不自由で息苦しいものを感じられたのではないのでしょうか。

こう考えてみると、子育て支援の場で受ける相談事の背景が見えてきた気がしました。つまり、子育てにおいても「正しいことをする（成果の出ることをする）」という思考に、知らぬ間にとらわれているのではないのでしょうか。どうせ英語教育を行うなら、より効果的で成果が出る年齢を狙いたい…という思考が、ほぼ無意識に立ち上がっているのではないか、と思うのです。

でも実際のところ、子育てほど、タイパやコスパからほど遠いものはないでしょう。眠たいなら寝ればいいのに、グズった末に親も巻き込んで寝かしつけに1時間…、大人のメニューとは別にわざわざ離乳食を作ったのに全然口に入れてくれず結局廃棄する…という経験は、親であれば誰でもしていることでしょう。このような回り道は、子育てには必須のプロセスではありますが、一方で、今の社会の価値観と照らせば「ムダ」

と言うしかないのかもしれませんが。タイパ・コスパの社会は、子育てとの相性が最悪だなあと思いました。

個人的な意見ですが、子育てはたぶん「Don't be Evil」でよいのです。避けた方がいい Evil は、子どもを攻撃したり支配したりすること、くらいでしょうか。そのような心持ちで子育てをすることができたら、子育てはもっと自由になるのかもしれませんが。

先日の発刊記念のトークライブでも『どうあるべきかよりも、こういうことはやらない方がいい、くらいの感覚で』という言葉がありました。まさに、「Do the Right Thing」じゃなくて「Don't be Evil」で、という話だなあと感じて大きくなずきました。結果的に、団親子によってあちこちから教えを受けた、こしばらくでした。